番組「家族、親族からの被害・性虐待」を見て

２日連続で性的虐待の事例と被害からの立ち直り支援の自助グループ紹介の放送があった。

一般に、家庭は子どもが外の世界でストレスや傷付いた時、逃げ込む一番の安全の場所であり、傷ついた心を包み込んで癒してくれて再び外の世界に向かう勇気を授けてくれる一番信頼できるのが家族と云われている。

性的虐待は、父親や兄から受ける何とも陰惨で、しかも家族間のことでもあり、子どもは「家族を壊したくないから誰にも言えない」と思いがちなで表面に出にくいだけに、被害を受けた子どもは心の居場所をなくしてしまうという悲惨な状況に置かれ、苦痛、苦悩の日々であろう。

番組では何人かの被害に遭った女性の事例が紹介されていたが、今は２４才の女性は、小学５年生～１８才まで父親から性的虐待を受けたという。
最初は体を触るだけが中学生になった頃から何度もレイプされるようになり、恐れていた父親の子どもを妊娠し２ケ月で中絶したが､父親は更に暴力的に性虐待を続けたという。
中絶した命への懺悔と自分の父親の血が流れる汚い体ということ等から、「もうどうでもいい」と布団に火をつけ自殺を図るも大事に至らなかったが、放火の理由を母親や警察に聞かれても固くなに父親のことは話さず少年鑑別所に措置さられたが、そこで始めて安心して眠ることが出来、「ずっとここにいたい」とさえ思ったという。
今は、家族と離れて生活しているが、性的虐待の記憶が蘇って苦しくなったりパニックになることもあり、今も向精神薬と睡眠薬は手放せないという。

何人かの性的虐待を受けた女性の話し合いの場面では、同じ体験者同士の中でカミングアウトすることで苦痛や苦悩でパンパンだった心に隙間ができ、周りの人の言葉がその隙間にす～っと入って来て隙間を埋めてくれる感覚があるという。

当 HP でもしばしば触れているが、心のモヤモヤ、モンモンを言葉に出す勇気を持つことが、心の解放の第一歩であり、番組宛に投稿というカミングアウトをして更に取材に応じ、また番組に出ることもその一環であり、まずはカミングアウトして、安心でき見守ってくれる人々が周りにいることを、ぜひ実感して欲しい。
生きる喜びは人と係わり合う喜びであることからも、安心して話しを聞いてくれる人に出会う喜びの快体験をたくさん積み重ねて行って欲しいと、切に願う。

阿部幸泰　　（2012 年 2 月 3 日　記）